

日本科学者会議 京都支部ニュース

8月号 No.414

2018年8月13日発行

〒604-0931 京都市中京区二条通寺町東入榎木町95-3 延寿堂南館3階

Tel/Fax : 075-256-3132

E-mail : jsa-kbranch3132@mbox.kyoto-inet.or.jp

URL : <http://web.kyoto-inet.or.jp/people/jsa-k/>

ゆうちょ銀行振替口座 加入者名：日本科学者会議京都支部 口座番号：01050-6-18166

ゆうちょ銀行総合口座 加入者名：日本科学者会議京都支部 口座番号：14480-2800181

上記総合口座を他金融機関からの会費振り込みの受取口座として利用される場合は以下の内容を指定して下さい。

店名：四四八（読み ヨンヨンハチ） 店番：448 預金種目：普通預金 口座番号：0280018

目次

- 「JSA 夏の学校 2018」(7/27-28) 参加報告2
- 関西技術者研究者懇談会 7 月例会(7/8)の報告.....3
- 第 28 回自然科学懇談会 (7/14 京大楽友会館).....4
- 『日本の科学者』読書会 7 月例会(8/3)の報告：「市民と野党の共闘」が変えたもの5
- 2018 年度第 1 回 JSA 近畿地区会議報告.....7
- 京都支部研究討論会の報告：「資本論」と社会主義—20 世紀社会主義の経験から.....8
- ▼ 8 月～10 月の支部関連行事の案内（JSA 近畿も参照）9
 - ・『日本の科学者』読書会 8 月例会（8/23）
 - ・第 4 回支部幹事会（8/23）
 - ・JJS サポーター会議（8/26）
 - ・第 29 回自然科学懇談会（9/1）「DNA 二重らせんはどのようにして発見されたか—理論負荷的観察とパラダイム転換の実例として」
 - ・関西懇 10 月例会（10/14）「1. 南海地震の予測 2. 新潟知事選について」
- ★ シリーズ：私の憲法メッセージ「二人の父と憲法」（小野英喜）10
- 寄稿：『匿名ということ--「満州 731 部隊軍医将校の学位授与の検証を京大に求める会」の要請書によせて』（宗川吉汪）11
- 寄稿：『京都支部の研究討論会に出席して』（富田道男）14
- ◆ 支部幹事会・ワーキング会議だより15
- ◆ 近畿の催し物案内：「JSA 近畿 No.8.30」17

＜今年度会費の早期納入願い＞

7 月末現在、約 70%の会員が今年度会費を納入されました。引き続き今年度会費の早期納入にご協力願います。会費未納の会員には振込用紙を同封していますのでよろしくお願いします。

（支部財政担当幹事）

「JSA 夏の学校 2018」参加報告

夏の学校 2018 に参加して①

N・S (大学院生)

2018 年 7 月 27 日～28 日の二日間にかけて、大学院生や若手研究者を対象とした「JSA 夏の学校 2018」が開催された。今年は「若手研究者をめぐる状況と研究のあり方を考える」というテーマのもと、研究や教育をめぐる若手教員からの報告と研究者を目指している M2 の修士論文構想報告 (3 本) が行われた。2 日目の午後からは FW が予定されていたが、台風の影響で残念ながら中止となってしまった。

今年の夏の学校は 1 泊 2 日と例年に比べ短期間であったものの、北海道や愛知、京都など全国から 30 名程度の院生が参加し、研究会ならびに交流会ともに非常に活発な議論がなされていた。京都支部からは夏の学校初参加の M2 の院生と私が参加した。M2 の院生はこの夏の学校への参加をきっかけとして京都支部に入会してくれ、さらに初参加にもかかわらず修士論文構想報告にて自身の研究について報告もしてくれた。

報告会では報告内容に対して、報告者の研究分野を越えた様々な分野からのコメントや感想が出され、報告者は修論の構想段階ということもありそれらの意見に惑わされてしまう感覚に陥ってしまっていたかもしれないが、そこに JSA のおもしろさや意義があるように感じた。というのも、修士論文やその後の研究において所属ゼミの枠を超え、さらに専

門分野の枠を超えた意見やコメントをもらえる機会というのは非常に少ない。そうした中で、今回の修論報告会は自分の研究を社会との関わりの中で位置づけたり、専門にとらわれず自分の問題意識を広げたりできる貴重な機会になっていたように思う。研究分野を横断するかたちで全国の院生が集える機会は皆無に等しい中で、こうした JSA の夏の学校や若手の企画は非常に得がたい存在である。

最後に、カンパを通じてこうした若手の活動を支えてくれている方々に感謝を申し上げたい。いつもご支援いただきまして、ありがとうございます。

夏の学校 2018 に参加して②

N・H (大学院生)

一般に、大学教員への就職事情の悪化が語られるようになって久しい。この状況を背景に、大学院生にも相応の「業績」が求められる時代となっているのは周知のとおりである。かつては大学院でのオーバードクターにも寛容であったとされるが、現代においてそれは半ば伝説であり、大学院生には大学院の教育課程を 5 年で卒業し、その課程の中で公刊論文数本と博士論文の執筆が求められる。大学院生の研究にとって最も大切な「時間」は、絶対的に失われている。

研究時間の確保がそれだけ難しいとなれば、さしあたり院生としては時間当たりの密度を

高めて立ち向かう他ない。今回夏の学校に参加して、その一つの対抗軸を認識できた。それは若手教員の講演会において端的に示されたように、同年代の院生との研究会を組織することである。講演会では、院生にとっての運動の位置づけや厳しくなる研究環境の中で研究をどう進めるのかといった論点が提示され、それに応える形で経験から同年代の院生との研究会が重要である等の具体的な事実を伺うことができ実りの多いものだった。個人的には、文献の検討会だけならばともかく、執筆した文章を互いに持ち寄ることなどは目から鱗である。とはいえ、後にも述べるように、地方圏においてはこのように同年代の大学院生で研究会をというのはなかなか難しい物とを感じる。首都圏の院生の充実振りは率直に羨ましい限りである。

これだけでも得るものは相当大きかったが、修士論文の研究報告を通じて、主張の根拠をどのような形で示すか、あるいは自分の研究

をどのような研究潮流に位置づけるのかといった問題提起と議論を経て研究への自己認識が深まった。そしてもっと直接的に、重要な先行研究を提示・紹介してもらうことができた。

さらに同年代の院生との交流も今回の「夏の学校」の大きな目玉であると思う。些か個別的な事情でもあるが、私の所属する大学院とそのゼミにおいても日本人でかつ博士後期過程まで進学する同年代の院生が少ない。そのため日常的に関係性を持つのは同じ研究室の先輩院生となる。それ自体大変助かっているのだが、やはり同年代で同じような時期に同様の葛藤を持っている院生と喋ることは、上手く言葉に落とせないが得難い経験となった。悩みもそうでないことも銜いなく話せる人がいる場所として、夏の学校は大変有難いものであるように思う。また機会があれば参加したいものである。

関西技術者研究者懇談会 7 月例会の報告

日 時：2018 年 7 月 8 日（日）14 時～17 時

場 所：国労会館

参加者：7 名

報 告：西山一男 氏

テーマ：シュミレーションソフト FreeFem++
について

このテーマを選んだきっかけは昨年末に発生した新幹線の台車亀裂問題である。報道された写真によれば亀裂が発生した部位は台車の構造からみて「応力」が集中する部分であ

る。このように一般的に構造物のどこに応力が集中しやすいかは定性的にわかる場合が多い。これを「定量的」に評価しようとする場合に使用されるのが「有限要素法（Finite Element Method =FEM）」である。もともと航空機等の構造物の構造解析でコンピュータの発展とともに発達した技術である。数学的には偏微分方程式の数値計算である。

1970 年代までは構造解析の分野には「光弾性計測技術」と称する分野があった（透明な弾性体に偏光技術を適用し「縞模様」によっ

て応力集中度合いを見る)。1980 年台からのコンピューターの急速な発展によりこの技術は姿を消した。

FEM はいろいろな境界条件（重力も含めて）の下で一定形状の物体（弾性体）の応力集中度合いを計算するものである。数学的には弾性限界内で偏微分方程式を解いていることになる。現在コンピューターの発展と共に構造解析の分野では必須なものとなっている。

地球の表面を形成している「地殻」も第ゼロ近似では「弾性体」とみなせる。各プレート弾性体の内部には他のプレートからの外力等により「歪（エネルギー）」が発生し、これを緩和しようとして地震（直下型）が発生する。たまたま 6 月 18 日の「北大阪地震」から間がなかったこともあり近畿の地殻の「応力歪」のことも話題になった。全国約 1300 点の国土地理院電子基準点では GPS により約 20 年前よりその地点の変動（もちろんある基準点に対する）を連続的に観測し一部は公開されている。そのデータを使用し FreeFem++ で一定領域（近畿）での歪（エネルギー）を計算した結果も示した。

FreeFem++ はその名のように Free なソフ

トとして、パリ大学で学生に偏微分方程式を理解させるため開発された。しかし大変有用だったこともあって日本の数学者も完成させる上で協力した。

FEM は構造解析分野の他、温度・熱問題、流体力学、電磁気その他「偏微分方程式」が出てくる分野で用いられ、今日ではコンピューターのハード、ソフトの発展によりそれぞれの分野で細分化され発展している。

FreeFem++ は学生に対する教育用として大変有用と思われる。フリーソフトとして誰でもダウンロードして使用することができる。

これからの日程

日 時：8 月 25 日（土）～26 日（日）

テーマ：夏の合宿（高島市）

担 当：参加者

日 時：10 月 14 日（日）

テーマ：1、南海地震の予測 2、新潟知事選について

担 当：国村 勝氏

（文責：西山一男）

第 28 回自然科学懇談会(7/14 京大楽友会館)

志岐常正氏（京大名誉教授・地質学）

「複雑系に起こる激変事象としての災害－伝統的、類型的方法で研究することにより発生する盲点と想定外事態－（京都で、今起こり得る災害を挙げて）」

今回の自然科学懇談会は、上記のような志岐さんらしいタイトルと内容の講演会で、参加者は 12 名であった。

最初に、世界（宇宙）を複雑系階層構造として理解することの必要性を強調されて、その理解なしに、既存の科学の系統的・伝統的手法に依存することにより想定外事態が起こることを強調された。その具体的例として、災害問題を扱うときに、地球の構造を複雑性を軽視して単純化して数値化・モデル化に走るあまりに、実態を無視した対応となってい

ることを、若狭原発における活断層問題を例に挙げて説明された。若狭湾は新潟・神戸ひずみ帯の一部で、近畿三角地帯と呼ばれる活断層帯に位置している。敦賀原発の活断層問題でも単純化しすぎて、二次断層・三次断層という複雑な活断層系を軽視していること、スケーリング則や基準地震動の設定においても、法則化を急ぐあまりにデータの散らばりを無視していると指摘された。地道な実態調査を重視する地質屋の、数値化・モデル化を重視して予算をかすめ取る地球物理屋や土木屋に対する「ぼやき」としては評者も同意できる内容であった。

そして、災害の自然的要因が地球温暖化や地震の活発化にみられるように近年変化していること、大規模開発や情報化による社会の変化で災害の社会的素因も拡大しており、これに対応すべき防災科学が経験則主義に陥っ

ている。このままでは南海トラフでの超巨大地震の津波で東京・名古屋・大阪は破壊されて「日本沈没」となるか、巨大噴火や隕石落下で国難的災害となることは必至である。これに対して科学者や JSA はどう対応すべきなのか、その存在の意義が問われている。そして、災害科学をはじめとする複雑系階層を扱う現代科学、とくに教育体系の見直しが必要と結ばれた。

志岐さんが最近に何度も「遺言」として強調されている内容で、非常に重要な文明論的主張であることは理解するが、簡単に答えの出る問題ではなく、複雑系を理解せよとの一般的主張は理解できるが、具体的な対策は提示されているわけではない。志岐さん一流の話し方とプロジェクターの図の不鮮明さが理解をさらに妨げたように思われた。

(文責：鈴木博之・地質学)

『日本の科学者』読書会 7 月例会 (8/3) の報告

7 月号特集：「市民と野党の共闘」が変えたもの

標記例会が 8 月 3 日午後 3 時 30 分より支部事務所で開かれた。参加者 6 名。7 月号特集の中から以下の 3 篇の論文が取り上げられた。

中野晃一「市民の政治参加と政党政治の変容—『占拠』から『選挙へ』」(紹介：菅原建二)

日本は、1980 年代末から 1990 年代前半にかけて、国政選挙制度を、これまでの中選挙区制(1955 年体制)から小選挙区制に変更し、イギリスが代表的な事例として知られる二大政党制を基軸とした、いわゆる「多数決型民

主主義」、別名「ウェストミンスター・モデル」へと誘導することを目指した。その結果、2009 年の総選挙で民主党政権が誕生した。しかし、民主党政権は、政策推進に十分な力を発揮できずに、2012 年の解散総選挙で自公政権に敗れた。自民党は僅か 16% の得票率(有権者比)であったにもかかわらず、小選挙区制のおかげで議席数で単独 6 割を超える圧勝をおさめた。これ以降、一強多弱と言われるように、二大政党制からはほど遠く、1955 年体制の時よりなお自民党支配が強化され、野党は分断され、弱体化した。2014 年の安倍に

よる解散総選挙の結果は、2012年衆院選とほとんど変わらず、自公連立与党の「圧勝」で、野党共闘はとてもできる状況ではなかった。

しかし、選挙の翌日、民主党や共産党が関係する委員会やセンターおよび超党派の市民運動連合体の3者により「戦争させない・9条壊すな！総がかり行動実行委員会」（総がかり）が結成され、市民運動側で超党派の共闘態勢が整えられることになった。更に、2015年に学生により「リベラル勢力の結集を呼びかけ」たSEALDsが結成された。総がかりやSEALDsは、抗議行動や集会の開催ごとに野党議員や幹部を招き、国会や選挙において野党共闘の実現を働きかけた。更に、同年、「安保法制の廃止と立憲主義の回復を求める市民連合」（市民連合）が総がかり、SEALDs、を初めとした5団体の有志によって結成され、2016年の参議院選挙における32の1人区すべてに、野党の協議・調整によって候補者を一本化することを要請した。結果として、32の1人区のうち11選挙区で野党統一候補が勝利した。

2017年、安倍政権は森友・加計問題などで低下した支持率の回復を狙い、野党陣営の足並みの乱れをついて、解散総選挙を仕掛けてきた。この時、突如、民進党が小池百合子をトップにした希望の党への合流を発表したことにより、民進党は分裂、野党の細分化が更に進んだ。しかし、立憲民主党の躍進などに見られるように、市民運動と候補者や政党関係者が培った信頼関係などの力は崩れることなく継続している。代表制民主主義の再建への道のりはまだ先が長い。市民の政治参加の広がりや深まりによって、政党政治は確実に変わり始めている。

佐々木寛「新潟県の市民と野党の共闘について」－「市民政治」の生成と展開（紹介：山口進次）

新潟県では2002年の参議院補欠選挙、2004年の参議院選挙、知事選挙において、民主党、社民党、連合、市民グループの4者が、無所属候補を擁立する「新潟方式」が実施されていた。

2015年に設立された「市民連合@新潟」は安保法制に反対する、社共の壁を超えた広範な市民運動を目指す、市民参加型選挙の経験に基づきながら、2016年以降は共産党も加わり「新潟モデル」と呼ばれる市民ネットワークを築いた。

そして2016年の参議院選挙において、自公推薦の候補者に対し、民主、共産、日本維新は無所属の候補をたて、僅差で当選させた。

続いて行われた知事選で「新潟に新しいリーダーを誕生させる会」は新潟県柏崎刈羽原発の再稼働問題で、反原発の無所属候補を自民推薦の候補に、大差をつけて当選させた。

岡田健一郎「高知県の市民と野党の共闘について」（紹介：清水民子）

2017年総選挙で高知2区では、無所属・野党共同候補・広田一氏が当選した。それ以来的までの共闘の経過を紹介し、高知県の共闘の特徴を探ろうとしている。

共闘の土壌の形成を本論では、2010年の「郷土の軍事化に反対する高知県連絡会」結成から述べている。米軍艦船の高知寄港や陸上自衛隊の県内への移駐に反対して、「平和運動センター」と「平和委員会」が協力した。2012年には「原発をなくし、自然エネルギーを推進する高知県民連絡会」、2013年には自民党憲法草案や特定秘密保護法採決の

情勢に応じて「国民主権を守り、憲法を暮らしに活かす懇談会」が発足する。

2014年、集団的自衛権行使容認、2015年、安保法制の具体化に際し、「戦争させない、戦争に行かない、高知憲法アクション」が個人参加の方式で結成された。学生や「ママの会」、大学人の動きもあった。

2016年の参議院選挙では、徳島との合区の問題も加わり、政党間の統一候補調整は難航したが、民主党候補を無所属・野党統一候補とし、12項目の政策合意にこぎつけた

（「立憲・平和・共生県民連合・高知」）。残念ながら当選には至らなかったが、高知県内

の票は僅差であった。

2017年4月には次期衆議院選挙に向けて「憲法アクション」にワーキンググループを設け、「政策の柱」23項目を公表。候補の統一は難航したが、公示直前に1区共産、2区に上記の広田氏が無所属でと決まり、2区での当選を勝ちとった。

高知の共闘の特性について、著者は県の経済構造として企業の大規模な拠点に乏しく、農林水産業・中小企業を基盤とする自民と公務系労組を基盤とする野党が対峙する「55年体制」が残っているとコメントしている。

2018年度第1回JSA近畿地区会議 報告

日 時：2018年7月13日（金）13:00～16:30

会 場：京都支部事務局

参加者：上野（奈良）、後藤（兵庫）、小島（滋賀）、岩本（大阪）、宗川（京都）、河野（大阪、近畿地区常幹）、書記：左近（京都、近畿地区常幹）

1. 6月23-24日全国常任幹事会報告（左近）

資料を用いて説明がなされた。当日の討議状況の報告。

各種規則改正の確定：会則、幹事会規則、地区規則。

53期決算・54期決算報告：地区会議費は、会議実施後、組織活動費（地区会議）に申請して交付してもらえる。各支部の活動補助は、研究活動費の支部研究活動補助に申請のこと。支部活動の手引き：各支部の活動における留意点や、実務手順に関する確認を行った。

「全国会員名簿収集のお願い」について：近

日中に、全国常任幹事会から全国の会員名簿収集のお願いが各支部事務局長宛ならびに全会員に送られる。その依頼状について検討を行った。

（1）最後のほうに「会員管理」とあるが、具体的に何を示しているのか明示いただきたい。このままでは分かりにくく誤解を与える。

（2）マル2の各会員への依頼文には、具体的な情報の収集方法が書かれていない。全国常任幹事会から各会員に依頼したあと、各支部で集約することになるが、その手順を明示していただきたい。文面の最後に、収集手順を記述していただきたい。

学術体制部会の報告：統合イノベーションについての説明がなされた。大学設置基準の改正により工学系の学科の廃止と課程の創設が可能となった。学科単位で定員していたのが、

学部全体で定員を管理し、教員は各課程に派遣され、今までの学科の自治とボトムアップのシステムが崩壊する懸念がある。

2. 2017 年度の活動整理 会計報告等(河野)

2017 年度は 2018 年 2 月 11 日に大阪経済大学にて近畿地区シンポとして、JSA 関西経済シンポジウムが開催された。会計報告がなされ、承認された。

3. 2018 年度の活動計画

今年度の近畿地区シンポは、「東南海巨大地震、直下型地震、集中豪雨などによる災害について」をテーマとする。国土研にも協力いただき、京都支部を中心に準備を行う。前年度は 2 月であったが、切迫した課題でもあることから、講演者との相談を早期に行い、9 月開催が可能であるかも検討する。7/19 (木) 開催の京都支部幹事会で検討を行う。

4. 大学図書館における「日本の科学者」(JJS)の購読について

滋賀県内の大学図書館における JJS の購読状況が報告された。大学図書館に JJS を定期購読し配架させることで、大学生や院生の総合学術的な学習や研究に非常に有用であるので、各支部単位で各大学の購読状況を調査し、購読していない大学の図書館には購読を進めるように、全国の支部事務局長に依頼する。なお、各支部事務局長への依頼手順については、全国事務局と相談を行う。各大学図書館や公立図書館の配架状況は web の CiNii で確認が可能である。

5. 2019 年度からの地区体制について(大会での会則改訂に伴い)

1.にも関連した事項であるが、会則改正がなされたので、全国では新しく幹事会が発足することを確認した。近畿地区からは従前通り 2 名の地区選出常任幹事である。

京都支部研究討論会(「資本論」と社会主義—20 世紀社会主義の経験から) 報告

7 月 15 日の午後 2 時～5 時の 3 時間、「キャンパスプラザ」の龍大サテライト教室で、京都支部の研究討論会「<資本論と社会主義—20 世紀社会主義の経験から>」が開かれた。

細川孝 支部幹事(龍谷大学)による司会のもとで開かれたこの集まりで、支部会員以外の希望者も加わる約 30 人の参加者は、まず最初に、講師の森岡真史氏(立命館大学)による上記表題どおりの研究結果の概要説明を約 1 時間にわたって聴いた。

<近年、所得・資産格差の拡大、金融面の肥大化、雇用の流動化などで資本主義経済の

諸問題が深刻さを増し、「資本論」の復活>が叫ばれることが多い>が、<現代社会でマルクスの遺産を継承するうえでは 20 世紀社会主義の巨大で悲劇的な経験に学ぶことが不可欠>であり、<それを抜きにした資本主義批判は傲慢である>という基本視点から行われた森岡氏の説明は、I.「マルクス社会主義論の概要」、II.「運動の担い手と戦術」、III.「マルクス社会主義論の問題点」の 3 項目にわたる包括的なもので、参加者それぞれが社会体制の将来展望にかかわる多様な問題点について考えるうえで貴重な機会となった。

とりわけ、「マルクス社会主義論の問題点」についての論述で、講師の主張が、＜マルクスは機械制大工業が発達するなかで生産手段の私的・分散的所有が意味を失うと断じたが、そうした所有制は思想的・政治的見解の多様性や個人の自由を保障するうえでの必要条件だった＞、＜社会的規模での発達した生産、分配、欲求充足の機構はマルクスが想定したような「透明・単純な」かたちで構築できないことが分かった＞、＜私的所有や商品生産

を廃止した社会を暗黙裡に理想化するような資本主義批判は再考を要する＞、＜現代は、共有された将来社会のビジョンという意味での「展望」をなくした社会である＞、＜未来社会の派手な目録作りではなく、地味な社会的規制の積み上げに努めるべきだ＞といった諸点を強調するものとなったこともあって、参加者の間からの熱心な意見交換が予定時間の最後まで続けられた。

(文責 田中雄三)

8月～10月の支部関連行事の案内（「JSA 近畿」も参照）

1. 8月読書会

日時：8月23日（木）15:00～17:30

場所：京都支部事務局

テーマ：「日本の科学者」8月号「タンパク質科学」

担当：小山・胡桃坂論文（宗川），野田論文（大倉），菅論文（菅原）

2. 第4回支部幹事会

日時：8月23日（木）18:00～20:00

場所：京都支部事務局

3. JJSサポーター会議

日時：8月26日（土）13:30～16:30

場所：大阪支部 国労会館

4. 第29回自然科学懇談会

日時：9月1日（土）13:30～15:30

場所：京大楽友会館

講師：宗川吉汪氏

演題：DNA 二重らせんはどのようにして発見されたか
—理論負荷的観察とパラダイム転換の実例として—

5. 関西懇10月例会

日時：10月14日（日）14:00～17:00

場所：国労会館2階小会議室（JR天満）

テーマ：1，南海地震の予測 2，新潟知事選について

担当：国村 勝氏

憲法の前文に示された「平和」は、戦争を永久に放棄することと共に、基本的人権や幸福追求権など諸権利を保障することによって、戦争被害者の私に生きることを保障してくれた。私には、私をこの世に出現させた「英一」という名の父と、生き方や働くことの意味を身体で示してくれた「太郎」という二人の父がいた。

英一は、衛生兵として招集され中国各地をめぐり、傷ついた日本兵の治療をし続けた。東京深川の木場で生まれた私は、そこで1年数カ月を過ごしたが、アメリカ軍のB52による無差別爆撃が激しくなり、父・英一は、母と私を京都に疎開させ、一人で工場を守るために東京にとどまった。1945年3月10日、アメリカ軍の東京大空襲は、東京を焼け野原にし、10万人以上の市民を殺戮した。この時、英一は跡形も無くにこの世から消えた。私にとっては、73年を経過した今でも父・英一は行方不明のままである。なぜなら木場周辺は焼夷弾の火災で生き残った人はいないからである。

京都の田舎で母と私は英一の帰りを待ったが、5年経っても上着の切れ端も、骨の破片も私たちには届かなかった。父の故郷の墓には下着が埋葬されているだけである。京都に疎開する直前、英一は母に対して「英喜を医者にして、戦場で傷ついた人々を救える人間に育ててほしい」と、2歳たらずの私の将来に自分の願いを託していた。

戦争を始めたこの国から、東京大空襲の被害者である私たちには、今まで何の保障も生

活への援助もなかった。すべてを失った母は、生きていくためにも私を育てるためにも、第二の父・太郎と再婚した。戦争は、相手国の人々を殺戮するだけでなく、自国の将来ある若者の命を奪い、傷つけ、生きる術をももぎ取る。

第二の父・太郎は、中国戦線に徴兵され、1939(昭和14)年5月左肩から銃弾が入り脊椎に当たるといふ重傷を被った傷痍軍人であった。そのため太郎の左肺はつぶれ、脊椎損傷で両下肢が自由に動かさなくなっていた。太郎は、2年間の病院での治療後、兵役免除になり農業を続けていたが、その仕事には、多くの困難を伴った。当時、牛を使って田圃を耕す時も、刈り取った稲を荷車で運ぶ時もそれを脱穀する時も、両方の手から杖を手放すことができない生活であった。私はこのような父の姿を中学生の時の文集で「両足を地面からはがすようにして、歩いている父」と表現した。

私は、小学生の時から農業を手伝い、中学生になると太郎を自転車に乗せて送迎したり、父の代役として地域のさまざまな行事や奉仕活動に参加していた。川柳をたしなんでいた太郎は、その頃の心境を「一枚の赤紙生きざまを変えていく」と詠んでいた。

私が中学生の頃、太郎の写真アルバムの中に、首と手を切り離された男の裸体の写真を見つけて「これは何」と尋ねた時、父は大きく身ぶるいして「見るな」と言っただけで黙ってしまった。

「それは自分がやったのではない。日本軍

が何の罪もない中国の人をこのように切りまくっていた。その証拠の写真だ。これが戦争だ」と教えてくれたのは、私が高校生の時だった。この言葉と、両足を引きずりながら田畑に向かう太一郎の姿は、侵略戦争への鋭い告発となり、私に憲法が持つ平和な日本と国民が主人公の社会をつくるという大きな展望といかなる戦争にも反対する反戦への道を示していた。

「片肺の どこまでもつづく生命線」、「意欲だけ確か けわしい道つづく」と川柳に詠んでいた太一郎は、一言も不平を言わずに辛いことにもその中に喜びを求めて 80 歳まで生きた。その生きざまは私の生き方の基となった。

戦後、現在の平和憲法ができ、その第 9 条ですべての戦争を放棄してから 73 年間、日本人の中に一人も戦争で傷つく人も、命を奪われた人もおらず、戦争をして他国の人を殺すこともしていない。この憲法を変えることは、再び私のような体験をする子どもや孫をつくることにつながる。私は、二人の父を戦争という愚行で失った。戦争は、単に父親を失うだけではなく、残された家族の日々の生活は極めて困難になり、毎日、毎時、戦争がもたらす悲哀に直面させる。その上、その家族の人生を長期間にわたって狂わせてしまう。

私は、英一が私に託した「医者になって戦病者の治療を」ではなく、子どもたちを再び戦場に送らないためには、「憲法を守る、9 条を守る、人権を守る」という確信を持った国民を育てることであると決意して教員の仕事を選んだ。わたしが教師になってから数年後、太一郎が詠んだ川柳に「原子力電気でヒゲをそる平和」がある。この川柳に、私は大きな衝撃を受けた。

当時、私は教師になって「沖縄返還同盟」などに加入し、「戦争反対」や「沖縄を返せ」という運動に参加し始めた時であった。原子力発電の問題点を鋭い感覚で感じていた父は、原子力発電は原爆と同じであることを見抜き、原発をそのままにしているのは本当の平和はないことを、川柳を通して私に示した。

この川柳は、私が 37 年間の高校と 15 年間の大学での講義で、学生に原発の原理と問題点、原発事故の事実などの教材を自作して授業実践をしてきた契機になった。そして現在では、「原発ゼロをめざす左京の会」の活動に参加し、子どものための本「フクシマから学ぶ原発・放射能」(かもがわ出版)を執筆し、京都民報に「1 から分かる原発問題」の連載を書き、多くの人に講演を続けていることの原点になっている。今、私はこうした生き方が、二人の父への恩返しであると思っている。

寄稿：匿名ということ―「満州 731 部隊軍医将校の学位授与の検証を京大に求める会」の要請書によせて

宗川吉汪

去る 7 月 26 日、「満州 731 部隊軍医将校の学位授与の検証を京大に求める会」は、アジア・太平洋戦争末期に人体実験の疑いのある

論文を執筆した 731 部隊の軍医将校に医学博士号を授与した経緯の検証を求める要請書を京都大学に提出した。

要請書は以下のような文言から始まる。「貴大学が、京都帝国大学時代に医学博士を授与した旧満州 731 部隊軍医将校（以下、同人）の学位論文（以下、当該学位論文）の主論文に人道上看過できないねつ造と医の倫理に反する不正な箇所が含まれている疑いがあります。」つづいて同人の論文「イヌノミのペスト媒介能力に就いて」の中に人体実験と疑われる箇所のあることを指摘し、「実験動物がサルであったかヒトであったかを検証する義務」が京大にあるとして、「もしヒトであったことが判明した場合、すみやかに学位授与を取り消されるよう要請します」と結んでいる。

上の要請書では軍医将校の氏名が匿名になっている。しかしながら要請書作成段階では軍医将校を匿名にするか否かで起草者の間で意見が割れた。結局、注の部分に平澤正欣の名を記載することにはなったが本文では匿名になった。要請書作成に参加した私にとって要請書の中心人物である平澤を匿名にして軍医将校という階級で表すことは納得しがたいことであった。魂の抜けた文書のように思えたからである。

そもそも論文執筆者の平澤の責任はどうなってしまうのか。名前を出すことにどのような支障があるというのか。それに対して、京大に求めるのはあくまで論文に人体実験が含まれているか否かの検証であって平澤個人の問題ではない、個人の名を出すと注意がそちらに逸れて問題が拡散してしまう恐れがある、さらには平澤や遺族の名誉を汚すことになるかもしれない、といったようなことが匿名の根拠として主張された。

取ってつけた理由の名誉毀損はさておくとして、上の主張は一見もっともらしく聞こえる。たしかに執筆者を問題にしなくとも論文の内容からだけでも人体実験を検証することができるかもしれない。

学位論文で人体実験が疑われる箇所の一つは、「発症サルは（ノミ）付着後 6 ～8 日にして頭痛、高熱、食思不振を訴え」というくだりである。（カッコは宗川）ヒトならいざ知らずサルが頭痛を訴えるはずがない。また、「発症サル中 1（10 匹付着のもの）は 39 度以上を 5 日間持続し」とあるが、サルの体温は種によって異なることや日内の変動幅が大きいたことが知られている。それにもかかわらず、サルの分類上の記載がなく、体温測定時刻や使用サルの平常の日内変動幅と観察された体温との関連について記載がない。

この学位論文は全体として極めてずさんである。イヌノミ以外の実験動物の学術名は一切記載されていない。使ったマウスやモルモット、ラットの学名すらない。ましてサルの学名など期待すべくもない。指摘されている体温に関しても、使ったサルが一番低い体温を示す時刻で毎日測定したと強弁することもできる。もしかしたら体温計の目盛り自体が狂っていたかもしれない。とにかく体温上昇の差が問題なので絶対的体温はさして気にしなかった、という言い訳もできる。また科学論文では擬人的表現はご法度であるが、未熟な研究者は論文に臨場感を出そうとしてつい擬人法を使ってしまう。「サルが頭痛を訴えた」と観察者は思った、というわけである。

発症サルを解剖して各臓器のペスト菌を調べた表が論文に載っているが、そこには抜かりなく「尾」が付いている。ヒトに尻尾は付いていない。

臓器	肺	肝	脾	腎	淋巴腺	附着部位	胆汁	尾
ペスト変化	-	+	++	+	+	-	-	-
塗抹	+	+	+++	++	++	-	-	-
培養	+	++	+++	+	+	-	+	-

論文だけを検証する限りにおいて、使用された実験動物がサルではなかったと厳密に断定するのは困難なようだ。いくらでも言い逃れができる。

論文中のサルがヒトであったか否かについては、やはり、論文執筆者が平澤正欣であることを抜きに検証できないのではないか。平澤が731部隊で人体実験を含む細菌兵器の開発に深く関わっていたことを考えることで、はじめて、彼の業績の一部である学位論文が人体実験を基にして執筆されたと判断することが可能になるのではないか。

平澤は1933年に京大医学部を卒業後、1935年9月～36年7月まで陸軍医学校乙種に在籍した。1937年10月にパイロットの資格を取得した後、1939年3月～41年3月まで731部隊で石井四郎部隊長と北野政次軍医中將の指導の下で細菌兵器の研究に従事した。1941年7月～44年3月まで再び陸軍医学校で甲種学生として石井の下で細菌兵器の研究に携わっている。1942年7月、石井は731部隊長を退き、北野と交代していたが、1945年3月に再び部隊長に復帰した。平澤はその直前の1945年1月31日に731部隊に再赴任している。平澤は石井と常に行動を共にしていたことが伺える。

石井の率いる731部隊が細菌兵器開発のためにマルタと称する拉致被害者を使って人体実験を行っていたことは周知の事実である。731部隊のあったハルビン近郊の平房の近くの安達（アンダー）で1939年～45年の敗戦直前まで、ペストノミと宇治式陶器爆弾を使った人体実験が何度も行われていた。731部隊林口（リンコー）支部長の榊原秀夫軍医少佐は、1945年4月5日午後、石井部隊長参加の下、安達でマルタを使って行われた炭疽菌爆弾の野外実験に立ち会った様子を生々しく供述している。（森田靖郎『告白 731部隊』）丸太に縛り付けられた4人のマルタの上に炭疽菌を充填した陶器爆弾が軽爆撃機から投下された。投下は平澤正欣軍医少佐と増田美保軍医少佐によって行われた。マルタは、発症状況などが調査された後、殺害され解剖に付された、という。平澤は1945年6月に航空事故で死亡したことになる。

平澤の学位論文の冒頭に、研究目的と結果の要旨が記されている。それによると、1940年（昭和15年）に満州の新京（現在の長春）で流行したペストがイヌノミの媒介によるのではないかと疑い、それを実験的に証明するために研究を行なった、とある。当時イヌノミがヒトのペスト流行に関与しているという事実は知られていなかった。要旨は以下のよ

うに締めくくられている。「詳細の実験的説明のため動物の感染試験により該蚤も亦ペスト媒介者なる事実を確認し更に進んで特殊実験を行ひ先人の見解と異なり犬蚤も亦人類に対するペストの媒介者たる新事実を発見するに至る茲に之を報告せんとす」(下線 宗川)

使用した実験動物として、マウス、海狸(かいめい、モルモット)、白鼠(ラット)を挙げているにもかかわらずサルは省かれている。

「特殊実験」でサルを使用したとあるが、サルの実験がなぜ「特殊」なのか、サルを使った感染実験でイヌノミが「人類」に対するペストの媒介者になるという「新事実を発見」したとあるが、科学的にはせいぜい「推論」でしかないはずだ。サルで証明したとしてもそれが即ヒトで証明されたことにはならない。生物学の常識だ。

京大への要請文の匿名をめぐる議論の過程で、私はしきりにグリム童話の「ルンペルシュティルツヘン(ガタガタの竹馬小僧)」の話を思い出していた。小人が自分の本当の名前のルンペルシュティルツヘンを言い当てられて身を滅ぼすという物語である。集合名詞の

軍医将校ではなく、固有名詞の平澤正欣を検証しなければ彼の論文の正体を暴くことはできないだろう、というのが私の意見である。

平澤は細菌兵器開発のために人体実験を担当していた軍人であった。イヌノミペストの実験は彼の重要な研究業績である。学位論文中のサルがヒトであったと考えるのは自然なことである。まさか母校の京大医学部に提出する論文にあからさまにヒトで実験した、と書くわけにはいかなかったと思われる。その程度の“人間性”はあったのだろう。がしかし、ヒトに尻尾を付けてサルにしたのは“悪魔的”ねつ造と言わずして何と言えよ良いのだろう。

京都大学はこのほど軍事研究を行わない旨の宣言を出した。過去の反省なしに現在の理解はなく、未来の展望も生まれない。京大は「平澤正欣の学位論文」に真摯に向き合ってほしい。1975年1月～88年3月まで京大ウイルス研究所に在職した者として、京都大学が人類平和に貢献する学術の教育研究の殿堂であり続けることを期待したい。

寄稿：京都支部の研究討論会に出席して

富田道男

去る7月15日に“「資本論」と社会主義 — 20世紀社会主義の経験から”と題する森岡真史氏(立命館大)による報告と討論の集会が行われた。

報告はレジュメに沿って行われ、近年の資本主義経済社会における所得・資産格差の拡

大などの諸問題の深刻化が進む中で、マルクスとその著書『資本論』が再び採り沙汰されるようになっている。しかし、資本主義を止揚する社会主義という考えにおいて、かつてマルクスが展望したものが復活しつつあるわけではないとして、その問題点4項目を挙げ

て解説された。その中で印象的なことは、人間は労働者であると同時に消費者であり、暮らしに必要な消費財を好みに合わせて選択する個人の権利といったようなことについては、マルクスは全く考えていなかったということであった。

大学で理系の教育・研究に携わり、資本論という本の名前しか知らなかった筆者には、「社会的欲望」など分かり難い専門用語もあったが、レジュメの「おわりに」として纏められた内容から話の大筋がほぼ理解できたように思う。それはまず第一に、崩壊したソ連邦は制度としては社会主義体制ではあったが理想とした素晴らしい結果はもたらさなかった、そしてこの不一致の原因がマルクスの社会主義構想それ自身のうちに在ったこと、第二に、資本主義の要諦とされている私的所有や商品生産の体制を取り込んだ社会主義体制を構想することが肝要であること、第三に、それを実現する道は、資本の横暴に対する社会的規制を積み上げていくことである、というものであった。これらは、現在の日本が社会主義社会を展望する際に、20世紀社会主義の経験から学ぶべき事項として整理されたものであろう。特に第二の点では現在の中国共

産党政府の進める社会主義市場経済の展開がその具体例に該当するように思える。

自分なりに社会主義社会というものを考えてみると、交通企業や通信企業など非製造業はさておき、製鉄企業など物の製造加工に関わる主要な生産手段各種を社会全体で所有し維持管理するとしても、物の生産計画は、需給バランスを考慮して立てられるべきであり、需要に基づかない生産などおよそ科学的生産様式とは言えないであろう。各種生産物の社会的価値により需要の把握のための社会組織の規模は、「売り手・買い手」の市場も含めて、多様で多元的なものとなるであろうが、いずれにしても資源・資材の有効利用のためには正確な需要把握に基づく生産が行われなければならないし、素早く必要とする消費者に届けられる社会でなければならない。

このような空想に浸りながらふと思った。今やることは、何はともあれ安倍政治をやめさせることである。核兵器禁止条約に不参加を表明し、戦争法、売国的カジノ法や残業代ゼロ法を作った安倍政治を終わらせる事、そして、原爆製造技術は持つべきであるという勢力を抱え原発再稼働を進める自公政治を終わらせることが今の大事ではなからうかと。

◆◆◆◆ 支部幹事会・ワーキング会だより ◆◆◆◆

2018年度第3回幹事会（7/19）および第3回ワーキング会議（8/3）の報告

1. 会員の現況（8月1日現在）

一般会員231、特別会費会員4、家族割り特別会費会員3、若手会員6、
若手特別会費会員14、会員合計258、読者4
3人増になっています！

2. 新入会員と転入

竹中寛治さん（一般）ならびに院生（若手特別）が8月から入会

松島泰勝さん（一般）が沖縄支部から転入

3. 会費納入状況（7月25日現在）

今年度会費納入者：一般 164/229, 特別会員 2/4, 家族割 3/3, 若手 2/6,
若手特別 7/13

17年度会費未納者：一般 8, 若手特別 2（若手は全員納入済み）

4. 会計報告（会費は7月25日まで）

2018年度累計		2018年度7月決算	
収入累計	2,691,419円	7月收入合計	104,095円
支出累計	<u>1,345,646円</u>	7月支出合計	<u>282,436円</u>
収支累計	1,345,773円	7月収支	-178,341円
前年度繰越	<u>489,974円</u>	前月繰越	<u>2,014,088円</u>
7月末残高	1,835,747円	7月末残高	1,835,747円

5. 会員拡大について

8月期には転入を含めて3人増でした。年間目標12人です。引き続き会員拡大を是非お願いします。

4. 7月～8月の支部関連行事（支部ニュース7月号発行～8月号発行）

7月12日（木）支部ニュース7月号&「京都の科学者」No172発行、「日本の科学者」
8月号発送

7月13日（金）近畿地区会議

7月14日（土）第28回自然科学懇談会

7月14日（土）第32回原発問題連続学習会

7月15日（日）京都支部研究討論会

7月19日（木）第3回幹事会

7月26日（木）「満洲第731部隊軍医将校の学位授与の検証を京大に求める会」
要請書を京大副学長に提出

7月27日（金）～28日（土）夏の学校 in 東京

8月3日（金）第9回ワーキング会議

8月3日（金）8月読書会

8月10日（金）近畿地区シンポ相談会

8月13日（月）支部ニュース8月号発行、「日本の科学者」9月号発送

（文責 宗川）

